

「そして、人生は続く」

主任司祭 晴佐久 昌英

西暦2006年が、終わる。一人ひとりにとって、どのような一年だったのだろうか。

愛する家族を亡くした人がいる。新しい家族が生まれた人もいる。初めて教会を訪れた人がいる。洗礼を受けた人がいる。つらい闇を味わった人がいる。つらい闇に光が差した人もいる。

それぞれの人にそれぞれの思いがあるだろうが、救い主の降誕祭にあたり、はっきりと宣言したい。

「あなたが神からいただいた一年、西暦2006年は、恵みの年であった」

と、ここまで読んで、どこかで読んだことのある文章だと気付いた人は、相当熱心な「いしずえ」読者である。実はこれは、ちょうど一年前、2005年の「いしずえ」12月号に書いた巻頭言の出だしをそっくりそのまま、西暦の数字だけ変えたものである。

今回、この文章を書くにあたって、ふと去年の年末はどんなことを書いたんだろうと読み返してみたら、その内容があまりにも感慨深かったので、思わず自分で引用してしまった。

「愛する家族を亡くした人がいる」と去年書いたときは、よもや翌年母を亡くし、自分もその一人になるとは思ってもいなかった。しかし、神のみこころは人間には計り知れない。どんな想像とも違う2006年が現実として与えられ、そんな自分自身に、そして母に向かって、ぼくは宣言しなければならない。「あなたが神からいただいた一年、西暦2006年は、恵みのときであった」と。

なにがあろうとも、すべてを「みこころのままに」と受け入れるのは、キリスト教信仰の要である。これはしかし、試練のうちにある人にはなんと重く厳しい信仰だろうか。そして、にもかかわらずそれを受け入れるならば、なんと尊く美しい信仰だろうか。自分に都合のいい想像とは全く違う厳粛な現実を、あせらず、嘆かず、「みこころ」として受け止める信仰。

ぼくの口癖のひとつに、「そして、人生は続く」というのがある。いいことも、悪いことも、ともかくみこころとして受け止めた上で、しみじみと、ひとつひとつづやく。「そして、人生は続く」と。今年、母を亡くしてから、万感の思いで、何度そうつぶやいたことが。

昨年の巻頭言の最後は次のような一文で締めくくられていた。

「神のことばを語る現代の預言者として、天使のように宣言したい。『あなたが神からいただく新しい年、西暦2006年は、恵みの年である』。」

今年もまた、「みこころ」へのいっそうの信頼をこめて、信じるすべての人に、とりわけ2006年を試練のうちに過ごした人に、宣言したい。

「あなたが神からいただく新しい年、西暦2007年は、恵みの年である」
そして、人生は続く。